

ほなひ歴史通信

第87号

2018.6.1

文化遺産シンポジウムから見たこと

藤井達也

先の二月十一日に第八回目を迎える「大子町の文化遺産を活かす」シンポジウムを聞きに行きました。これは、町内の文化遺産を活用した活動を行う各団体が、それぞれの活動内容を発表する場であるとともに、聴講者も交えて今後の文化遺産の活用を考える機会でもあります。町内外の多くの方々の大子に関わる姿が、私に関心を持つ中世の大子（保内）の姿とオーバラップしました。本誌のタイトルにも含まれる「保内」という地域の成立が確認されるのは十六世紀初めです。現在の大子町域とほぼ重なる二四の村が集まって「保内廿四村」とも呼ばれていました。

十六世紀初めの頃の大子（依上保）は、南は佐竹氏、北は白川氏、東は岩城氏、西は那須氏と各地域の有力な領主の勢力が拮抗する境界地域でした。各勢力の競合を経て、南の佐竹氏が大子地域に進出をし、もともと陸奥国に含まれていた依上保は佐竹氏によって常陸国の依上保と呼ばれていくこととなります。同時期に依上保も「保内」と呼ばれるようになります。

境界地域という保内の性格は、保内を戦争の場とするだけではなく、保内の住人が周辺勢力と多様な結びつきを持つことを促しました。保内に基盤を持つ武士等は、自身の生存のため、複数の

領主に従属することがありました。黒沢に拠点を置く深谷氏がその一例で、南の佐竹氏と関係を持ちつつ、西の那須氏とも連絡を取り合っていました。また、深谷氏はもともと北の白川氏の家臣であったとも思われます。

天文七年（一五三八）に八溝山下之坊というお寺の鐘を作る際には、保内住人たちは南の佐竹氏と北の白川氏の両勢力を大檀那として迎えました。各勢力の政治的パフォーマンスという意味合いもありますが、保内という地域に多くの外部勢力が関わっていたことを示す事例です。

以上のように、保内は外部勢力との関わり合いの中で、地域のまとまりを築き上げてきました。外部勢力の関与にも関わらず、保内という地域の枠組みは分割・解体されることなく、現在の大子町に変わらず引き継がれています。

大子町は、茨城・福島・栃木の各県の間に位置し、その境界性は変わっておりません。しかし、交通の不便さに伴う人の行き来の少なさからか、外部に対して少し閉鎖的な部分もあります。

「大子町の文化遺産を活かす」シンポジウムでは、町内ばかりでなく、大子町の文化に関心を持つ町外の方の活躍が印象的でした。そういった方々と町内の方がともに活動をし、お互いに刺激しあえるいい関係が築かれています。これは中世以来大子地域の風土を築き上げてきた、境界という地域性につながるものと思われれます。地域としてのまとまりが長く続き、文化・産業・風土等の資源が豊富な大子町は、多様な背景を持つ外部の人たちが関わる場所（境界）となる可能性を秘めているのではないのでしょうか。

少子化及び高齢化が深刻な大子町では、地域の将来を作っていく上で、町外の方との関わりがますます重要になってきます。大子に少しでも関わりたいと思う方を受け入れる雰囲気作りが必要となるでしょう。シンポジウムから垣間見えた明るい兆しを楽しみに見守りたいと思います。

（水戸市立博物館）

江戸の詩人大窪詩仏（三）

島崎和夫

二つの故郷

名を広く知られるようになった詩仏は故郷に帰ったことがあるのか。北は新潟、仙台、秋田、西は金沢、大坂まで、二年に一度は大きな旅にでているのに、郷里を訪れた形跡はありません。

しかし二七歳で出版した初の詩集『卜居集』に「懷荏土故人」（江戸の友人を思う）と題する詩があつて、その題下に「予時在常陸」（予時に常陸に在り）と注記があることから、この詩が常陸の故郷の風景を詠んだことがわかります。おそらく父の死があつて故郷を訪れたのでしょう。

辞去繁華返旧溪
較知風物不能齊

繁華を辞し去りて旧溪に返り
較くらとして知んぬ 風物の齊ひとしきこと能わざるを

白梅二月纔將破
黃鳥三春猶未啼

白梅 二月 わずかにまきに破れとし
黃鳥 三春 なお未だ啼かず

一水浮烟山漠々

一水の浮烟 山 漠々

満村過雨麦萋々

満村の過雨 麦 萋せい々

尋思江上親詩友

尋思す 江上の親詩友

月夕花晨分品題

月夕花晨に品題ひんだいを分かつて

賑やかな江戸に別れを告げて故郷に帰ってきてみると、

季節の移り変わりが江戸とははつきり違うことを知らされた。

白梅が二月になってやっと咲きだし、

春三月になつてもウグイスの声が聞こえてこない。

川のもやの彼方に山々がひっそりと連なっており、

村を包んで通り雨が過ぎたあとには、一面の麦畑が青々と広がっているばかりである。

この寂しい山里とは異なり、わが親しき友人たちは、月の夕べ、花のあしたに、隅田川辺をそぞろ歩きながら、題を分け合つては詩作にふけていることであらう。

（読み下しと詩意 大森林造「大窪詩仏と大久保村」『日立史苑』五号所収）

五句と六句の対句は詩表現として評判が高いのですが、一水とは池田村を流れる久慈川を、山とは奥久慈の山並み、麦畑は九割が畑の大久保村の風景でしょうか。詩仏にとって旧溪つまり故郷は、池田と大久保の二つであつたと思えるのです。

ところで、郷里の一つ大久保村の郷医で詩仏のいとこにあたる大窪枕流の墓碑に文と書を寄せています（「枕流大窪先生墓」『日立の碑』所収）。そこには、枕流がかつて江戸に遊びにきて、詩仏の家に身を寄せていたときのエピソードが添えられているので紹介します。

江戸の藩邸につめていた水戸藩士が咳が止まらないといって枕流を訪ねてきた。肺に腫れ物ができているので、吐剤をもちいれば治ると診断した。その藩士は帰ってから藩医にみせた。藩医は痰にすぎない、薬をもちいずとも治るといった。藩士は枕流にそのことを報告に來た。そこで枕流は私は田舎の医者、間違っているかもしれない。あなたの思うようにしたらよいと答えた。ついてきた家族に十五日ほどで膿をはくだろうと言った。まさにその通りになった。あわてた家族が枕流の元にやって來た。もう術はなかった。藩医の言にしたがった藩士は、水戸に帰ってまもなく死んでしまった。

枕流の確かさを讃える文ですが、その裏に詩仏の藩医という権威への、ひいては水戸藩への嫌悪を感じさせるものです。

詩仏が故郷に残したものは、内大野村（太子町）の十二所明神、馬場八幡宮（常陸太田市）、大津村（北茨城市）佐波波地祇社の扁額と池田村の桜岡元の寿蔵碑、枕流の墓碑とわずかでした。（日立市在住）

大生瀬分校の思い出

— 一年生から四年生まで —

益子忠久

昭和二十年（一九四五）、終戦の年の四月に分校に入学した。以後、何か事ある毎に隊列を組んで本校（内大野小学校）へ行き、行事に加わっていたが、何故か入学式だけは分校独自で行われていた。区長をはじめ大生瀬西地区の有志や入学児童の父兄の見守る中で、たしか、私達一九名（男九名、女一〇名）の入学式であった。唯一本校から見えられた当時の校長先生（近津校長だったと記憶している）が、お話の途中で、緊張して身じろぎ一つせずに聞き入っていた私を指差して「非常に態度がよろしい」とほめてくれた。

入学当時の教科書は全て上級生（新二年生）の御下がりではあったが、紙質の良い色刷の立派なものだった。戦後、ガリ版刷の新聞まがいの薄い教科書となったので、余計にそう記憶しているのかも知れない。

終戦の八月十五日までは、たかだか四ヶ月余の戦中教育であったが、この間にも何回か本校での行事に参加した。奉安殿から校舎玄関までの間を一年生が最前列で、直立不動で頭を下げ、正装に威儀を正して御真影を捧げ持つ校長先生の歩みを、上目遣いで目撃していた。

また、終戦までの間に幾度か敵機が襲来したが、警報伝達のある都度、授業を中断して一年生から四年生まで全校生徒が校舎脇の雑木林の中へ避難した。たまたま目立つ色の着物を着ていたりすると、「敵機に狙われるから傍へ寄るな」などと、大真面目で言い合いをしていたものだった。

校舎から離れた校庭の片隅に、父兄が奉仕作業で造った「防空壕」があったが、防空壕へ避難した記憶はない。そして終戦とな

った。分校は夏休み中だった。炎天の一日だった。

戦争は終わっても周辺の食料不足は益々厳しく、田に自生する芹や土手の蒨や蓬をはじめ山菜という山菜は先を争って採り尽くし、木の実や茸類も採取時期には多勢の人が連日朝暗いうちから提灯の灯を頼りに山に入り、腹の足しにした。

わが家でも終戦の翌年の五月の節句は、そば粉八分に米粉を混ぜた塩味餡の柏餅だったことを覚えている。

食糧難のため校庭を耕して甘藷を植えたが、木の根のような筋だらけの芋しか採れなかった。それをも蒸して、皆で分け合って食べた。また弁当について語れば、一部の恵まれた子供を除いては麦飯の「日の丸（弁当の真ん中に赤い梅干し一個）弁当」であり、なかには細いサツマ芋二、三本だけの弁当の子もいた。弁当を持たされず、昼休みになると姿を消す子もあった。また、学校に弟妹や奉公先の乳幼児をおんぶして来る子もあった。

給食のはしりは、たしか二年生の始め頃からの脱脂粉乳を湯で溶いた飲み物で、児童の父兄、主にお母さん方が交替で炊事をしてくれていたように思う。時に入れ物に使った麻袋の麻の繊維が混入していることもあった。どうしても飲めない子もいたが、すきつ腹には美味しく感じられ、余り物を二杯も三杯もお代わりした記憶がある。しかしこの給食は長くは続かず、この後は給食炊事当番の父兄持ち寄りのみそ汁に引き継がれた。

また、冬季には「暖飯器」で弁当を暖めた、良く暖めようとなの方に入れると、麦飯が弁当箱に焼き付いたり、弁当袋から出せないほど熱くなったりした。昼時近くなると、暖飯器から漂ってくる食べ物の匂いに気が散って授業も上の空の思いがあった。この「暖飯器」と「ミソ汁給食」の記憶は、本校に移っての五、六年生時と中学生時代にはない。あるいは、これは大生瀬分校かぎりのものだったのかも知れない。

（大子町大生瀬在住）

近代化前夜のまちなみ

大金祐介

先日、増子俊勝氏の所有する古写真一七枚と絵葉書九枚を拝見した。いずれも素晴らしいものばかりであったが、私はある一枚の絵葉書に目を奪われた。その絵葉書は、近江屋外池商店（現・器而庵）の前から金町通りを南に向かって写したものであった。下段にその絵葉書を書せたので、ご覧頂きたい。中央に写っている通りが金町通りで、その通りの左側の最も手前に写っている土蔵造りの店舗が近江屋外池商店である。

この絵葉書において特筆すべきことは、絵葉書に写っているまちなみの古さである。よく見ると、電柱が一本も写っていないのである。大子町に電気が通ったのは大正五年のことであるから、絵葉書に写っているまちなみは大正五年以前のものということになる。管見の限り、大正五年以前の電柱が立つ前のまちなみを写した古写真や絵葉書は、これ以外に見たことがない。それ故、私はこの絵葉書に目を奪われたのである。

この絵葉書は、宛名面の三分の一に通信文を書くスペースが設けられている。このことから、明治四十年から大正七年までの間に発行されたものと推測される。大正五年以前のまちなみが写っていることを考えると、明治四十年頃から大正初年までの間のまちなみが撮影され、それを題材として絵葉書が発行されたのではないだろうか。

大子町は、大正期以降に、近代化の象徴とも言うべき電気、電話、鉄道、自動車、洋風建築などが普及し、まちなみが大きく変化した。この絵葉書は、近代化の波がやってくる直前のまちなみを今日に伝えてくれる極めて貴重な史料である。

（大子町大子在住）



絵葉書「常陸大子町金町之景（常陸大子町大内商店発行）」

「打越地区の屋号と生業」「交通事情」今昔考

齋藤仁司

私の居住地区は、地区名「打越」と言う。町行政連絡班では「打越日向」「打越北向」の二班から成る。「打越日向」が一〇戸、「打越北向」が一〇戸で、合わせて二〇戸の集落である。昭和三十年代からみると、数戸が廃屋となっている。

昭和三十年代の「打越」では屋号が使われ、屋号の〇〇さんと呼ばれていた。我が家は、「東」である。専業農家で、一般的な米、麦、豆類、たばこ、蒟蒻、楮等を栽培するとともに肥育牛（当時馬だった牛に変遷した）鶏、兎、山羊等を飼育し、さらに茶や野菜等を行商して換金していた。

他に雑貨商店（酒・塩・タバコ店）が一戸あり、屋号は「土蔵」。さらに「鍛冶屋」「下駄屋」「桶屋」「旅籠屋」「呉服屋」等が私が見えている屋号である。今はこの全てが廃業し、普通の農家等になっている。当時は、天下野、高倉（現常陸太田市）から生瀬を経て奥州街道への間道であった名残であるようだ。特に天下野から小生瀬宿、内大野、打越、下野宮へ通じる街道、または、小中、小妻（現常陸太田市）から小生瀬柳町、小生瀬宿、袋田へ通じる街道が人馬の往来だったようだ。

私にとって特筆すべきは、「鍛冶屋」である。幼少の頃から小学校卒業くらいまで興味があって良く遊びに行き、見学していた。まさに、映画等で見える通りで、鞴でコークスの火を興し、大きな金鎚でトンカントンカンとリズムよく叩き、曲げたり伸ばしたりして単なる鉄の塊から農作業用具を作り出すのであり、魔法のようであった。もちろん農具の修繕もお手の物である。「下駄屋」「桶屋」も面白かった。こちらも同様、修繕依頼もお客である。特に、たまに行商で来る「籠屋」の竹細工修繕を軒先で見るのが面白く

楽しみだった。余談だが、昭和三十年代、神楽の一団が正月の他、時々各家を回っていた。子ども達が、軒先で行う神楽の一団の後を何人かについて歩いたのを覚えている。

また、昭和三十年代の大生瀬の交通事情は基本的に徒歩であった。バスも無く、汽車に乗るには、徒歩で一本松の峠を越えて水郡線下野宮駅に行き乗車した。これは大生瀬地区等の事情で、他の生瀬地域では、袋田駅に出て乗車するのが一般的で、北方面に行く場合に限って地区によって下野宮駅、東館駅を利用した。

私の父はどこへ行くにも自転車を使い、母は徒歩が常であった。小学校時、大生瀬分校から内大野本校へ行く場合、小学校二年生までは徒歩であったが、大生瀬地区は昭和四十年にバスが運行されたので、三年生からバスを利用した。その後は、バス通学である。中学校は、自転車通学である。学校に近い者は徒歩だった。

高校は、バイクで通学した。バイクと言っても、当時は元氣だった父が買ってくれた中古の、当時でも古い型の程度の悪い安価な物だった。もちろんバス通学者が多かった。その意味でバス通学者が羨ましかったのを覚えている。高校卒業後、就職したが、二年余りはバイクで通学した。やっと自動車を購入したのは、二年目の暮れのことだった。

「打越」は水郡線から遠かったもので、水郡線の記憶は、私の場合、母の里帰り位である。下野宮駅まで徒歩。汽車を南石井駅で降り、そこからまた徒歩だった。バスで行く方法もあったが、浮かしたバス賃で、時期により駄菓子やアイスクャンデーを買って貰った。妹を背負った母と行くと、いつも峠の洞門（手掘りのトンネルだが洞門と呼んでいた）まで祖母が迎えに来ていたのが思い出である。この時に汽車に乗れるのをとても楽しみにしていた記憶が鮮明である。

（大子町大生瀬在住）

大子町・鎮守の杜（八）

関戸神社（大子町頃藤六五〇六）

高根信和

車で、水戸から国道一一八号を大子町上小川方面に向かって走ると、久慈川と水郡線と国道が並行する場所がある。男体山登山の入り口となる滝倉の信号を過ぎると、県の出先機関である茨城県山間地帯特産指導所の看板が道路わきに建っている。ここを左折し、水郡線の跨線橋を渡ると数百メートルでT字路につく。左に折れ、火の見櫓を右に見ながら下り、集落に入ると関戸神社の鳥居が見えてくる。鳥居をくぐる。正面右手は急な崖となっていて、孟宗竹の林が下方の久慈川近くまで続いている。社は、まるで台地の突端部の要害に建てられているようである。

手水舎で口、手を清め神域に入る。関戸神社の社号標が目に入る。「昭和三年十一月建立 茨城県知事森岡二朗書」。さらに参道を進むと、安政三年（一八五六）九月建立の石灯籠が一对、狛犬が一对、石灯籠が一基奉納されている。右手には社務所があり、拝殿に廊下でつながっている。拝殿左手に木造、トタン葺き、間口二・五間、奥行二間の神庫、その前に二基の庚申塔、そのうち一基には安永二年（一七七三）三月の文字が読める。本殿の裏手には天満宮、近津神社、稲荷神社、水神社、竈神社、三嶋神社の末社が鎮座している。

拝殿は銅版葺き、間口六・五間、奥行三・五間である。本殿は覆い屋で保存策がとられているため、外からは見ることができない。境内に建立されている関戸神社奉賛会「神恩謝之誌」（昭和五十六年九月）には、「江戸中期、桧板葺の流造方一間で数多くの彫刻は狩野派の画風に莫大な金銀の極彩色を施した当地まれなる文化財である」と記載されている。祭神は天津彦根命（あまつひこ

ねのみこと）で、天照大神（あまてらすおおみかみ）と素戔鳴命（すさのおのみこと）の誓約のとき息吹の中に生まれた神で茨城国造（うばらきのくにのみやつこ）の祖と言われている。

社伝によると、第五二代平城天皇の大同元年（八〇六）の創建で、農耕の開拓と商工業の創業の基を開く神として、また疫病から民を守る神として氏子から厚く信仰されてきた神社である。当地は、古来焼山関が置かれたところと言われ、常陸国と奥州との国境で、関戸明神が祀られていた。

当時陸奥では、豪族安倍氏の勢力が増大し国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥の守として任地に下り、子の源義家と共に東国の武士を率いて安倍氏と戦い、出羽の清原氏の助けを得て安倍氏を滅ぼした（前九年の役）。義家は、京から東北へ向かう途中当社に立ち寄り、宝刀一振を奉納して戦勝祈願したと伝えられている。境内はスギ、ケヤキ、カシ、カヤの巨樹が鎮守の杜をつくり、ご神徳の威厳を醸し出している神社である。（水戸市在住）



産地づくりに向けた公的支援の展開（中）

―特産品・りんごのルーツを探る（九）―

栽培技術の向上や経営改善に関わる公的支援の主役は、茨城県山間地帯特産指導所（以下、「指導所」と略）と大子地区農業改良普及所（以下、「普及所」と略）であった。昭和二十九年、当時の大子地区農業改良相談所に赴任して以来四〇年間にわたって生活改良普及員として活躍され、平成六年に定年退職された臼井雅子さんは、両者の関係について次のように述べる。指導所は「あくまでも試験研究機関。それを現場で普及するのが普及所、それが役割分担です。（試験研究の成果を）農家に直接つなぐのが普及所なんです」と。両者が連携し、両者を軸にした動きが具体化していく。

りんご専門技術者の大森高行技師が指導所に赴任した昭和三十三年が一つの節目になったと思われる。同年十月、大子町リンゴ技術者協議会が結成された。構成員は、普及所、指導所、農産物流通対策指導員、大子町役場産業課、農業委員会、農業協同組合、生産者代表等である。「隔月一回、特産指導所に集って、技術の研修、今後の方向などについて話しあいがあった」という。当協議会を舞台にどのような研修が行われ、またどのような議論が交わされたのか、残念ながらその内容は定かでない。だが、この協議会の存在は周辺町村の注目を浴びたようである。「隣接町村からの反響が出て、昭和三十六年四月、本協議会をリンゴ研究会と改称し」、構成員の範囲も大子町農協、流通指導員のほか県北地域の関係普及所、町村役場産業課へと広域化した。その当時、「リンゴの植付は、大子町のみにとどまらず隣接町村の里美村をはじめ、御前山村に至る山間地帯の町村に広が」っていたというから、まさにその反映であつたろう。当研究会のねらいも、「技術の研鑽につとめること」であつた（茨城県農業改良普及事業二十年史）。

リンゴ研究会は、再び改編される。昭和三十七年七月、県北リンゴ指導研究会と改称された。今度は会則を定め、「県北リンゴ栽培の経営、及び技術の研究向上、並に統一をはかることを目的として、隔月に特産指導所、あるいは栽培農家へ集まつて技術の修得につとめつつ農家への技術指導にたずさわつ」た（同上書）。研究の場が生産現場に広がった点でより実践的になったとの印象が強いが、当研究会についても、会則の中身、具体的な活動内容、活動期間及びその効果等については明らかにし得ない。

ただ、こうした栽培技術、経営改善をめぐる一連の試験研究活動は、しかも普及所や指導所以外の関係機関や生産者をも巻き込んだ取り組みは、次第に一定の成果となつて現われ、生産現場に波及し、栽培技術の向上・安定化に寄与したのではないかと思われる。例えば、普及所が作成した「昭和三十九年度 地区農業改良普及計画書」は、りんごについて「主産地形成の方向に大きな転換が行われつつある」と指摘しているし、また四十一年度の同様の計画書も目指すべき「営農類型の現況と改良の方向」の個所で、営農類型の一つに「りんご十普通作」を設定し、次のように述べている。「りんごがようやく生産樹齢（六、七）年に達しつつあるが当面その収益は低いので補完作として、米、麦、そ菜等に依存している。近い将来りんごの占める所得も基幹となり得ることが見込まれるので、普通作部門の省力化とあわせてりんごの部門協業、共同施設の高度利用等により所得の安定向上を計っていく」と。さらに四十二年度の同計画書は、「主要農作目の主産地化を計るため、重点作目として」一〇品目を決定しているが、その一つにりんごが挙げられている。

これらの指摘からは、りんごが経営の一つの軸になりうる基幹作物として位置づけられつつあることが読み取れる。このことは、一連の試験研究活動の成果として生産者の栽培技術が向上し、収量が安定してきたことの証左であるように思われる。（齋藤典生）

熊岡美彦と袋田風景

神長 攻

「農家新緑(袋田温泉)」と題する油絵がある。大きさはP一〇号(縦四〇・九センチ、横五三センチ)、描いた画家は熊岡美彦で、昭和十三年(一九三八)五月作である。大きなかやぶき屋根の農家の庭には柿の木、物干、つるべ井戸があり、にわとりが放し飼いにされている。

熊岡美彦は、戦前、光風会展、帝展、文展、東光会展等で活躍した著名な画家で、経歴を簡単に記すと、明治二十二年(一八八九)現在の石岡市に生まれた。生家は大きな製糸工場を経営していたが、同四十四年(一九一〇)頃生糸の大暴落により倒産した。

大正二年(一九一三)二四歳で東京美術学校西洋画科を卒業、同十五年から昭和四年(一九二九)まで渡欧、同六年熊岡洋画研究所を東京巢鴨に設立、同七年東光会を結成、同九年洋画研究所を熊岡絵画道場と改め、多くの後進の指導にあたる。

生徒数は常時五百名程おり、ここから文化勲章を受賞した下館出身の森田茂やルーブル美術館に作品が収蔵された水戸出身の二重作龍夫らが育った。

二重作龍夫は『二重作龍夫画集』(昭和五十二年十一月)の中で、絵画道場の様子を次のように記している。「熊岡先生は一本気のいかにも茨城県人らしい気質の持主だった。指導も厳しく、水・土曜日の批評日には皆緊張して先生の講評に耳を傾けていた。大きな体躯でドシンドシンと廊下を響かせて地下室の研究所に入ってこられるとなかには緊張の余りオシッコを催すというような研究生もいた」と。太平洋戦争も敗色濃い昭和十九年(一九四四)十月一日、五五歳で死去し、絵画道場も戦災で焼失した。

「農家新緑」が描かれた昭和十三年(一九三八)には、四月十七日から二十六日まで「いはらき新聞社」主催の第一回茨城洋画展覧

会が水戸市三の丸にある茨城会館で開かれ、熊岡美彦は審査員として「白波立つ相模灘」、「バラの花」、「江ノ浦の春」の三点を出品している。

この展覧会終了後、できたばかりの袋田温泉ホテルに滞在して周辺の風景を描いたと思われる。翌昭和十四年(一九三九)の東光展には、「けぶる新緑(袋田)」を出品した。本人は一月から六月まで陸海軍両省の嘱託として青島や南京を回っていたので、出品作は「農家新緑」と同時期に描いたようだ。今後も大子地方の作品が発掘される事を期待したい。

(大子町西金在住)



編集後記

今年度最初の発行になります。来年三月に第九〇号記念号の発行を予定しております。ぜひ皆様の寄稿をお待ちしております。また、今年度第一回ふるさと歴史講座は、平成三十年八月四日(土)午前一〇時から大金祐介先生を講師に大子町立中央公民館で予定しております。詳細が決まり次第、七月の町のお知らせ版へ掲載しますので、興味のある方はぜひご参加ください。

(家田 望)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地
大子町立中央公民館 ☎ 0295 (72) 1148